

## 人間の社会について

中野情報技術研究所

中野敬三

人間の社会を考える場合、最初に人間について理解する必要がある。

人間の特徴として、2足歩行と大脳の発達を取り上げられる。

動物の大脳の大きさは、小さいものから大きなものまでであるが、体の大きさと比較して人間の大脳は飛び抜けた大きさである。そして、人間の脳は、大きさに比較して大量のエネルギーを消費する器官であり、脳を適温に保つことが生命の維持にとって必須条件となる。即ち、人間は類人猿と比べて多くの体毛を失ったが、脳の温度を保つために頭髮だけは失っていない。また、呼気による脳の冷却を防ぐために、副鼻腔などには大量の毛細血管が存在し、脳の保温を行なっている。原因が不明とされているアイスクリーム頭痛も、脳の冷却を防ぐための機構と考えることができる。

このような観点から、脳の優先的な立場を理解する必要がある。

さて、人間の進化は、2足歩行が先か、大脳の発達が先かという議論があるが、生理的早産を媒介として、2足歩行と大脳の発達が並行することにより、人間は進化を遂げたということが出来る。即ち、人間は2足歩行を行なうようになったため、産道が狭くなり、生理的早産が発生するようになった。生理的早産は子供が頭骨の柔らかい状態で生まれることを意味し、それは頭蓋の拡大を可能とし、大脳の発達を可能とした。

2足歩行を起因とする生理的早産により、人間の幼形成熟や幼形進化の基盤が形成されたことを意味するが、生理的早産は人間が未熟な状態で生まれることを意味する。

未熟な幼児を育てるためには、食料が十分に存在することが必要である。逆の見方をすれば、食料が十分であれば、未熟状態の子供を長期間育てることが可能となる。

幼形成熟や幼形進化といわれるネオテニーの原理で人間が大きな大脳を獲得するためには、十分な食料の確保が必要である。

妊婦の食事が高栄養価化することにより胎児が巨大化する現象は現在でも見られるが、人類の歴史においても、人間の食料事情が改善するに従って胎児が大きくなり、結果として生理的早産が進み、それが遺伝的に固定してきたと考えられる。

人類の頭骨の大きさが次第に大きくなってきたことは、人間がより未熟な状態で生理的早産により生まれた結果であるといえる。

そして、このような生理的早産を可能とするには、食料をより多く獲得するための知識が

必要になる。そして、食料調達の知識が人間に蓄積されてきた結果である。

食料のエネルギーについてみると、草食よりも果実食のほうが高栄養であり、果実食よりも穀類のほうが保存性もよくエネルギー効率も高い。そして、肉食は最も栄養価の高い食事となる。

狩猟採集生活においては、食料の存在場所に関する知識が重要である。しかし、食料の総量は、自然条件により決定されることになる。

日本は温帯モンスーン地帯に位置し、豊富な雨量と温暖な気候は、植物にとって恵まれた自然条件であり、安定した豊かな食料供給を可能とする。そして、日本の優れた食糧事情は日本人の生理的早産を促進する役割を果たし、日本人がネオテニ一的に進化することになったといえる。

狩猟採集生活のあとに到来した牧畜農耕生活においては、食糧生産量は飛躍的に増大した。農業の生産技術の発達により、人間は自然条件を超えて食料を増産することが可能となり、生産技術の発達と普及が重要となった。

人間の技術的進化は、人間能力の人工物化という過程であり、手と足の人工物化は道具、骨と関節の人工物化は機械、筋肉の人工物化は動力機関、脳の人工物化はコンピューターであるといえる。

コンピューターの発達は、人工知能の発達をもたらし、人工知能が人間の知能を凌ぐ時代が来ることが予見され、技術的特異点として議論されている。

情報不足の時代から、情報洪水・情報過多の時代に突入しているが、これからは人工知力不足の時代から、人工知力過大の時代に進もうとしている。

また、食料生産を考えた場合、自然条件の人工的改変としては、肥料が存在する。自然素材を使った肥料で、食物の生産は増大したが、アンモニアを基礎原料とする化学肥料は、食糧生産の飛躍的増大をもたらした。

農業機械の発達と肥料の増産により、食料は不足による栄養失調の時代から、過剰によるメタボリックシンドロームの時代に突入した。

耕作放棄地の増大は、食料不足から食料過剰の時代に移り変わった象徴である。

食料過剰により、武力による食料の争奪戦を回避でできる時代に移り変わった。  
現在の問題は、食料が十分あるにもかかわらず、偏在することである。そして、この偏在は暴力的手段により解決されるべきではなく、社会制度として解決される必要がある。

我々は、不足の時代から過剰の時代に突入したことを自覚する必要がある。

人工知能の発達とロボットの普及により、少数の人間の労働により、大量の物財が生産され、多くの人間が生産現場から離脱する状態が発生する。これは、物があふれているのに世界的に失業者増大して現在の世界の就業状態からも理解できることである。

生産現場から排除された人間に、如何に購買力を与えるかが、制度的な課題として現れてくる。

現代の人間は、人間の作り出してきた知的財産の上に成り立つ社会で生きている。  
即ち、現代の人間は、社会的な生物であり、単純な動物ではないという事実である。  
現代社会を成り立たせている知的財産は、先人たちが長期にわたり営々と積み重ねてきたものであり、これは社会的財産であり、個人の私有物ではない。  
そして、社会的財産である知的資産は、教育により引き継がれてきた。

現在の資本主義も、人間が作り出した社会制度のひとつであり、普遍の絶対的なものではない。

人間の生産力が低く、物財が不足する時代にあつては、経済合理性を追求する資本主義も存在理由を持つといえる。

しかし、社会の生産能力が巨大となり、物余りの時代になるとともに、人間の存在価値が再認識されるようになってきた。

物余りの時代には、経済合理性よりも人間合理性が求められる。

人間にとって働く意味が、労働力としてではなく、人間の主体的な活動となる必要がある。  
資本的企業から労働力として排除された人間は、ワーカーズ・コレクティブに代表されるように、人間の主体的な活動のばとして、働く場の創出が必要となる。

大切なことは、人間の住みやすい社会を作り、人間らしく生きることである。

そのためには、人間による人間の支配は、排除されなければならない。人間にとって必要

なのは、社会を維持し運営する制度であり、人間を統治する制度ではない。

人間は生まれたときは、大脳は「パソコンにプログラムが無い」状態に近い。

人間は、社会の中で長期の養育により、大脳がプログラム化されていく。

人間は社会により育てられた存在であることを自覚し、周りの人々を大切に、自己中心の利己的行動を慎む必要がある。

現在は、資本主義が高度化し、グローバル化という名目を掲げて世界をひとつの制度に変容させようとしている。このグローバル化の運動は、資本主義の論理に基づくものであり、行き着く先は資本による人間の支配である。

基本原理は、「どのような理由があっても、資本が人間を支配することがあってはならない。」ということである。

人類が築き上げてきた知的財産を利用して得られる利益は、適切な制度により社会にも還元される必要があるということであり、企業の社会的責任が認識される必要がある。

人間は社会的な存在であり、決して労働力商品ではないということである。

人間を商品化するものは、資本主義の論理であり、生命の論理ではない。

人類の文化の多様性が、資本の論理により破壊されてはならない。

日本の伝統や文化は、世界の至宝といえるものであり、それを守り発展させていくのが日本の社会の責任であるといえる。

国際化は、世界が単一化することではなく、多様な民族が百花繚乱の文化を競い合う社会である。

誇り高き日本人になることが、国際化時代の日本人の目標となる。

(2013年3月8日付け)